

龍膽寺雄全集

第七集

蘇工業學院圖書館
藏書章

龍膽寺雄全集 第七卷

昭和六十年八月二十日 印刷
昭和六十年八月二十五日 発行

著者 龍膽寺雄^{りゅうたんじゆう}

神奈川県大和市中央林間二一四―五

発行者 龍膽寺雄全集刊行会

河野進

発売所 株式会社 昭和書院

東京都新宿区神楽坂二一九

銀鈴会館二〇七号 下二六〇
電話 〇三二六〇九三五四
振替 東京七一八二二七二

印刷・製本 図書印刷株式会社

定価 二、八〇〇円

©1985 Y. RYUTANJI

ISBN 4-915122-52-2

目次

創作小説

風——に關する Episode.....7

踊り場と厨房.....45

黒牡丹の主人.....51

紫衣の夫人.....69

赤炉閣と海の城塞.....78

創作小説（戦前・戦中・戦後編）

妻と別れる.....105

美人名簿.....133

五郎丸の艶聞.....148

創作小説（最近編・未発表新作）

坂のある街の物語……………161

エッセイ 大自然の建築設計……………233

随筆 生きた心臓を捧げる古代アステカの神饌……………245

下妻で見たハレー彗星……………255

詩編 「ユキのALBUM」……………258

初出……………277

解説……………278

創作小説

昭和初期編

風

——に關する Episode——

風見の鶏は黄金で出来ている

風

科学は日夜新しい神秘を生んでいる。こういったらひとは不審するだろうか？ が、別にそれは不思議でも何でもない、神秘は科学に追いついてたれながら、結構また新しい住まいを見つけてはそこに巣喰つて、どうかすると鬚髯にたかる蜜蜂のように、トンボガエリをして科学自身にたかったり、——尤も、これだけのことはいいえ。あらゆる神秘は今ではものの輪廓にきりない、つま

り、神秘は最早ものの内容には住めなくなった。蜜柑の種子から蜜柑が生えるというこの謎は、とうに手際よくダイインに解かれてしまつて、今ではボン！と宙に蹴上げられたザボンのように、地球の傾斜へ橙色にかかった大きな満月も、死んだ火口やら干からびた海の癭痕に陽を受けている土の塊りにすぎない、などと眺めた方が、ずっと神秘でもあれば楽しくもある。黄昏前の朱に染まった大きな蒸発気の立体の奥に、地球の遙かな傾斜に沿つて、大都会の高層建築群が、實際線を影絵で限どっている。都会のザワめかしい汗くさい生活の底には、仮

りにこれっぽっちの神秘もないにしても、あの高い石の空際線には、歴史や物語やこれら人間の営みによる大地の神秘が埃のようにつもって、例えばナイルの河岸に立ってピラミッドの入り陽を仰いだ旅人のように、自分の長い影法師から永遠を感じたりするだろうと思われる。

星のまばらに暈をきた黎明近い夜など、蒼ざめた蹊路の闇に外套の襟を立てて、睡った建物の蔭から円屋根の頂を仰いで御覧なさい。露ばんで星を映した遙かな球蓋の空際には、必ず神秘的な妖精の世界がある。昼の舞台から追いたてられたあらゆる神秘たちが、指の頭ほどの奴まで残らず集まって、輪形に手をつないではひらいたりすばまったり、あの遙かなところでゴムのような勝手な跳躍をやっているのです。月の夜などは蹊路に落ちる小さな影法師を憚りながら、そうして空から吹きおろす夜風のたんびに、鼈の油虫のように他愛もなく風下へ吹寄せられながら。

街々の灯りを映した低い夜空は、どうかするとそんな時硝子窓のように桃色に焼け爛れて、絵硝子の明るいその曇の奥へ、薔薇の花びらのように星屑をボカしているのに、石の建物の壁には冷たく蒼く闇の苔が匍つて、夜

の呼吸に濡れた窓硝子に樹枝状に雫を伝わせ、鱗のように乾いた蹊路へ蒼く地図をにじませると、そこから斑に闇が膨れあがって、軒のあたりまで威猛高にのびあがったかと思うと、足元からじきに舌を出してそっちへ流れて、いつの間にか蒼ざめた水溜りになって、そこらへ冷たく鏡を忘れて行ったりする。鏡にはいつも街燈が並んで映っている。街燈はどれも古風に青銅で縁取られて、夜気に濡れた硝子の奥に病人のように青くガスマントルが瞳をともしている。これが蛾の翅の影法師ではなく魚の鱗でも動いていたら、この蹊路の一廓はさながら海の底で、よく見廻したらそこらに、脚をからめた海星やら珊瑚のかけらの一つも落っこつていよう。尤も、海にはどのみち近いのです。青銅の枠の中でガスマントルの一つ一つが、小さく青く息づいているのは、ひそやかな夜の風が街を曲って暗い海へ流れてゆくからです。そこらに散らばっている紙屑さえチラとも動かない夜の気流。――

わたしたちが木馬館前の広場と呼んでいるこの三叉路の石畳もこうした一廓です。石の建物に挟まれて一方は港の旧の棧橋へ、一方は海岸公園の石垣と緑の芝生

へ、この細長い三角の広場は、もと外人相手の露店が立ち並んだり、割栗石の広やかな舗装の上を、ゴム輪のリキシャがせわしく往き交うたり、両替屋の横文字の金看板が、艶やかな青い斑石の円柱の額にキラキラと陽を射返して、珊瑚細工を天鵞絨へのせた飾窓の前で瞳の底に海をたたえた外人の厚い鼻眼鏡を、五彩のスペクトルムに分光させたり、棧橋に客船がついた時など、街通全体が豊かに活気を呈して、犬の影法師をつれて歩くお豆腐屋さんの喇叭の音まで、そんな時には妙に晴れやかで浮気っぽいのです。

が、今は変わりました。

棧橋が埋立地の向こうの岸壁に移って、波止場の事務所や税関と一緒に、港街の繁昌が新しい地図をそっちへ拡げると、今ではそれが燐寸のペーパーのように華やかに、廃港の青い水のかなたにはかなく見渡せるだけで、旧の棧橋は潮風に錆び細った何かの鉄材やら、廃物の倉庫の錆割れた赤煉瓦の壁やら、茫々と草の生えたコンクリート囲いの空地やら、ともすると先の折れた旗竿のところに、何かの痕跡のように昼月がかかっていたり、第一海を御覧なさい。昔のままに打棄てられた浮標が、魚

の腸のように夥しく錆びて浮いて、そんなものは今どき鳴だつて振向きはしない。薄らに煤を浮かべたさざ波が淋しく空を映して、海月ばかりが世界の地図をでも変えそうに満潮を押しあげています。棧橋がこんな風なら、街の登路にだつて夜の灯りは途絶えて、木馬館前の三角の広場などはリキシャが走るどころか、暮れかたからかけて近所の子供たちがうちの庭のようにして集まつて、乾いた石畳の上で素捷こく影踏みをしているのです。さっきわたしは、神秘は今ではものの輪廓にきりないといった。子供たちにしつてそうで、登路を狭めた蔭から蔭へ、蝙蝠の翼のようにアチコチと影を翻して駆けながら、みんなでめいめいの影法師を不思議がついている。折角影を追つてそいつを踏まえた時にはもう影は消えている。そうして、両側の窓や扉を閉ざした高い石の建物の影が、円屋根や塔の切紙細工を黒々と登路に貼りつけて、さっきはポストは蔭っていたのに、今ではポストが自分で影法師を落している。登路は布のように街幅だけどこかへ流れて行くのでしょうか？ いや違う。これは地球が石の建物をのせて夜ぢゅうユルユルと廻っているのだと、学校の先生はおっしゃるのです。円屋根の影

法師が蹠路を越えてこつち側まではずに長くのびて来たからって、建物が夜なかに退屈がつて脊のびしたわけじゃない。昔絆緘の鎧やら兜の鉢金やらの埃を、飾りもののような羽根ばたきでバタバタと払って、ニホンのサムライの匂いを船のお客さまに売っていたその大きな石造の貿易商は、今では鰹戸の外へ因業に月を閉めだして、花崗石の円屋根のてっぺんに夜ちゅう妖精たちを遊ばせて置くのです。

妖精？いや、実は迷児の伝書鳩が一匹、織い桃色の脚にアルミニウムの番号札をつけて、錆色の胸毛を風に柔らかに膨らませているので、それよりか、広場で影踏みをしている子供たちが、ふとわれを忘れてはそこへ足をとめて、いつも謎めいた眼でじつと空を見上げて瞳を据えるのは、木馬館の壊れた漆喰の塔のてっぺんに、E・N・W・Sの錆びた文字を貼りつけた高い高い唐草の十字架にとまって、昼は陽を夜は月を黄金にとめて、風のまにまにキラキラと動いている不思議な風見の鶏です。何だっただけの鶏はあんなところに傲ってとまって、しょっちゅう落ちつきなく雲とともに動いていなければならぬのか。あれで空の風向が下界にもわかって、赤い鈎鼻を

したオランダ帆船の船長は、八百源の店で昔花野菜を値切っていたのを慌ててよして、棧橋から船の錨をあげさせようと、葉巻の煙を糸のように街通へ残して行ったものじゃそうで、今では帆船どころか、真鍮の通風筒を甲板に輝かした新式の羽根車船さえ、こちの棧橋へは停泊しないようになって、街通の店々は閉ざされ、真鍮楽隊が囁囁と海軍マーチを奏でて埃の中に木馬を廻していた木馬館も、いつか廃墟と化すと、塔のてっぺんの風見の鶏も、船夫たちから眇で見上げられるようなこともなく、年々に漆喰の壁は剥げ、甍は落ち、空往く雲の中で不思議な黄金の鶏だけが、相変らず傲った恰好で風に勇ましく肉冠を向け、今では下の広場で遊んでいる無心の子供たちからだけ、謎めいた瞳で見あげられている。――

「あの鶏はあれで純金じゃそうな。……」

昔より三分の一ほどにも間口を縮めた八百源の八十九になるお婆さんが、鶏の骨のように腰をかかめ、慈姑のとってを願で噛み噛み、塔を仰いでつぶやいたそうで、これが子供たちに伝わってからは、この黄金の鶏に対する彼等の尊敬は一段と高まって、黄昏時など入り陽を受

けてキラキラと空に動いているのを、太陽のかけらか何ぞのようになやうやく彼等は仰いだり、

「誰があんな高いところあの鶏をとまらせたろ？」

一人が疑問を打明けると、

「天の神さまもしんないよ。」

小さな子供はメソコを地面に置き忘れて、それから念入りに拇指の爪を噛みはじめたりして、——でも、広場の神秘はこればかりじゃない。ふとした折にサササと整路を撫でて、路次の石の建物の蔭から流れて来た乾いた眼に見えない冷たい気流が、クルクルと小さく二三度渦巻くと、向うの路次から別の埃風が、地面に誰かが踏みにじった破れたビラ紙を、ガサガサ見えない手で宙にささえ、長い布地のようになつと流れて、ポストの中に二つの風が追っかけっこをはじめると、次の瞬間にはもう激しい旋風です。整路に散らばったあらゆるもの、どこからか飛んで来た銀杏の落葉やら、キャラメルの潰れた紙箱やら、メソコのきれッばしやら、糸屑、落花生や蜜柑の皮やら、犬が脚から落して行つた縄ッきれやら、砂粒やら、そういったものが硝子の渦巻の中にみんな掻き寄せられて、外側は大きく内側は小さく凄じく回転し

て、おどろおどろしい響とともにたちまちに空間を濁し、不思議な円筒の中へこれらあらゆるものを捲上げては空へそれを弾き出して、——暫しの間はそれが生きもののように、整路の広場をアチコチと漂流し廻る。

「あ、旋風だ！」

子供たちの一人が叫ぶと、

「旋風だ！」

「旋風だ！」

あらゆる遊戯を棄てて彼等は、なだれるようにこの埃の円柱を追いはじめる。さまざまなのが脚にからだに顔にぶつかる。裾が腹までまくれ返る。輝やかなしい歓声とともに誰か一人の脚が、旋風の中心を占めて、甜られるような不気味な吸着に悲鳴を立て、瞬間にしてまた弾き出される。女の子は白くむき出た猿股の上に着物の裾を抑え、堅く睫毛を閉じてここんで、襟へ飛込んだ縄のきれッばしさえとる余裕はない。

気のきいた一人二人が持合させた紙きれを指で裂いて、次ぎ次ぎとこれを空間に放すと、旋風はやがて時ならに白い吹雪となつて、夥しい模倣者をめぐつて濛々と空へ渦巻きあがり、街のはしからさえ煙のように白々と

それが仰がれる。これらの無数の紙きれは、旋風の勢の衰えて消えたあとにも、ずいぶん長いこと遙かな空のかたに翩翻として、どうかすると上層の気流に乗じて、瑠璃色にみを走らした港の沖の方まで、キラキラと胡蝶のように舞って行ったりするのです。

こんな素晴らしい旋風は、木馬館前の整路の広場でできり見られやしない。この三角の広場には高い石の建物に挟まれた蔭合いの路次から、いつも向きの違う風のきれッぱしが迷い込んで来るので、それで、不思議なこの旋風が再々誘い出されるのでしよう。むろん、塔のてっぺんの傲った黄金の風見の鶏は、こんな下界の出来事などにはいつもそっぽ向いて、超然たるものですが。

子供たちにとって、しかし、木馬館前の広場の神秘は、まだまだこれだけにとどまりません。彼等にとってただの神秘以上の更に素晴らしい驚異は、――

気球の格納庫になった

L'HIPPODROME

です。競馬場^{ジャンプ}といったからって別に仔細はありません

ん。膠^{てん}で盤^{たて}を貼りつけた木馬が轡轡^{うづ}仕掛けで勇ましく昔駈廻らうと、それでもいいッぱし競馬場には違いないので、この木馬館の正面玄関の露台^{べい}になかば漆喰が剥けて、L'HIPPODROMEと、堂々飾り文字で浮彫^{うで}がしてあっても、別に僭越の沙汰でも何でもない。尤も、わたしたちのまだごく小さな時分に、この建物の裏手の辺から海岸公園沿いにズッと馬場道^{ばば}があつて、季節には競馬騒ぎで港街じゅうを湧きたたせたりするのは事実で、空高く打上がった火花の中から数旋の万国旗が現れて、輝かしく泡のはせるような海岸一杯の夥しい歓声に見送られて、それが海へ流れて行くのを、どこからか眺めたような記憶がわたしにもある。木馬館だった時代もしかしそう長くはないので、わたしが慶應義塾の学生でおおかた東京に暮らしていた時分には、ここはその頃流行のローリースケート場になつていて、真鍮^{しんそう}楽隊の海軍マーチのかわりに、今度は足の裏を擦る滑車が広やかな床の鏡に、縦横に未来派の素描を描いていた。だから、零落^{れんらく}したこの競馬場が今やわたしたちの細工工場になつて、唐草の漆喰に浮彫^{うで}したこの大広間の天井に、満月の同胞^{どうぱ}のような競技用気球^{ききゅう}が一つ二つ、重力の法則を逆さ

まにして野方途もなく浮き漂ってしようと、別に怪しむにも足りないでしょう。年に一回四月に國際的な顔触れで、埋立地の広場で開催される氣球競技会を満月競争と名づけたのはわたしの亡った父で、続けてその頃ずつと港街の市長だったわたしの父は、自分でも競技用の氣球を一つ持って、抱へ馬車の御者だった軍人あがりの市蔵という若者を天晴選手に仕立て、黄と緋の派手なハッピなどを着せて、万国氣球競技会へ出場の選手權を決定する四月の満月競争に送り出したり、——尤も、わたし自身これに興味を持ちだしたのはつい最近のことです。それとて、わたしの親友でこの方面ではすでに専門家である玉木の刺戟に負うところが多いのですが、玉木というのは、父親譲りのままわたしが経営している貿易商薔薇莊の旧からの支配人玉木老人の息子で、わたしよりも一と足早く慶應義塾の経済科を卒業して、薔薇莊の未来の支配人と目されており、さしあたりサンフランシスコの支店長に向けられる手筈になっているのですが、これが満月競争倶楽部の理事長で、現在では貿易商の事務どころか、氣球の研究に余念もないのです。

木馬館の二階の崩れた漆喰の塔の間が、氣流の観測所

を兼ねた仕事場。例の風見の黄金の鶏がこんなことから今更役に立とうとは、ちよいと思いがけないことですが、階下の大広間はむろん格納庫で、もともと人間のからだ一つの重みをつかつ宙にささえるだけの小さな氣球ですから、別段と吊籠がついているわけでもなし、網目の吊座から吊索をたらしただけ宙に浮かして置くと、二つ三つは楽々と天井に漂っている。時折こいつを玉木と二人で、大扉を開いた正面玄関から、漆喰の円柱に支えられた露台の下をくぐらし、あまりの身軽さに足を腕かせながら高い階段を降りて、その蹌路の広場に持ちだし、新しい操縦法の研究をしたり、不燃瓦斯の試験をしたりするので、これが広場に集まって影踏みなどをしていつも遊んでいる子供たちの、素晴らしい人氣の焦点になって、

「木馬館号！」

「薔薇莊号！」

それぞれひいきの筋も出来、どんな夜更けにでも蹌路へ飛出して来ては、吊索を抑えてくれたり、蹴んだ球囊をのぼしてくれたり、金槌や金床を運んでくれたり、あらゆる熱心な助手の役目を辞しません。木馬館号は鳶色

の気囊の腹に黄と白とで道化た木馬の絵模様を描かれ、これには横鰭や縦鰭まで鰭詰のように太く柔らかく曲つてついて、グロテスクにムクムクと頭が膨れているので、さしあたりこちらは男の子たちのひいきです。それにひきかえて薔薇荘号は優美で小柄なラッキョウ型の気囊に、桃色の地へ緋と白とで大きく薔薇の花が描かれて、見た眼も派手で美しいので、女の子たちは残らず異議なくこっちのひいきです。尤も、見かけほど優美でもなければ与しやすくもないので、一度など薔薇荘号の麻の椅子帯を冗談にさんじやくにからげつけていた女の子の一人が、ふとしたはずみにだしぬけに気囊に空へ攫われて、降着索のはしを偶然玉木が靴に踏まえていなくなったら、気囊はそれっきり女の子を月夜の空へ運びあげてしまったかもしれないでした。何でも木馬館のてっぺんの黄金の風見の鶏が、切紙細工の影絵のように、満月の黄色い暈を負うて高く羽搏いて、いかにもそれが嬉しげで、——いや、満月の明るい痘痕面がその時ばかりは、鮮やかに死滅した火山や海の土塊りに見えて、わたしは空の奥行の神秘さに、何かしらゾッとしましたよ。鼻の高いシラノ先生じゃありませんが、気球に空へ攫わ

れた女の子を、満月の暈圈の中に想像して御覧なさい。海の面に立ち籠めた夜の蒸発気の中に、今頃ピーターパンの帆船が遙々漂っているわけじゃあるまいし、子供たちは子供たちで、彼女の思いがけない冒険に、一斉に拍手喝采を送って、冗談じゃありません、めいめい自分が身がわりに、あわよくば空へ登りたいといった面持なのです。

塾路の広場のこうした気球の実験もさることながら、それにも劣らず大事なものは、気圧やら気温やら風向やら湿度やら、これら気象とりわけ気流の研究です。およそあらゆる科学測量の中でも、気流ぐらい複雑で、とらえどころがなく厄介なものはないので、空間の立体が交錯し、習慣と偶然とがそこで激しく争って、風見の鶏じゃありませんが、一瞬といえど落ちついてはいないので。地球の傾斜の片側を太陽が照らす。どここの焼けた凸凹の蔭からどんな気流が流れ出すか、球体の蒼い海洋のかなたで漂流船のような貿易風の迷児が赤道以南にどんな進路をとるか。これらがあらゆる規則と偶然とを縄なつて、見出表の上に大胆な曲線のいたずら書をするので、